別府町の米騒動

三重野　勝　人

米騒動は、大正七年（一九一八）、第一次世界大戦が大正三年（一九一四）から始まったが、その終わった年に起った。特に別府町では暴動とまでいかないまでもかなり厳しい状況が展開した。

この別府町の米騒動を中心に、県下の米騒動の動きについて述べてみたいと思う。

大正時代の食生活については、北海部郡から南海部郡のような芋と鰯を主食とした処の町村史を手懸けてきた関係から、米というものに縁のない地域の事情をつぶさにみてきた。私の母は米水津の竹野浦の生まれである。山と海の間のわずかに耕地のある処ですが、祖母がご飯をこぼすと、這いながら「もったいない、もったいない」といって米粒を拾って食べていたことが印象に残っている。それを、食べ物に、一汁一菜に感謝しなければいけないという単純な気持ちで米粒を拾って食べていたと思っていた。ところが、津久見の四浦半島や上浦町の歴史を調べていくと、感謝の気持ちもあるが、日常米を食べていなかった、つまり小さいときから年をとるまでほとんど米のご飯を食べていなかったのでほんとうに米がもったいないとの気持ちで拾っていたのだ、ということがわかってきた。

上浦の老人会の方々が『上浦町の生活史』という冊子を出している。それには、衣食住の生活から農業・柑橘業・漁業・味噌醤油の造り方などまであらゆる生活の手立てが纏められている。これをみると、上浦では米のご飯はハレの日かよほどのことがなければ食べない。普通の日には、鰯や芋が主食であったと書かれている。

米を食べなかったのは、このような南郡の耕地の狭い

別府町以外の状況（表１）

町村	状　況（備　考）
大分	8／14　米価引き下げ（30銭）実現なき場合暴動の貼紙、大分署厳重警戒、⇒郡長報告 不穏の行動貼紙あり、市内に応召兵散宿、10数日間 8／14　厳重警戒検挙数名　⇒関門日々
竹田	8／14　町内数箇所に、町民大会開催８／16・午後９時岡神社集合の貼紙、警戒中　⇒郡長報告 8／15　夜岡神社にて町民大会の貼紙、町長・区長を介し不参加呼びかけ、沿道警戒のため流会　⇒警察史
臼杵	8／14　14、15の両日にかけて同志集合を見るも事故なく退散、中旬より貼紙・米価引き下げの強要などあり。⇒郡長報告 8／13　某貼紙により世論扇動 8／15　簿暮れと臼杵公園下に町民大会（届けずみ）、警官潜入誘導鎮静　⇒警察史
佐伯	8／16　多少不穏の兆候あり、事無きを得る　⇒郡長報告
中津	8／13　13日頃〜、北九州暴動頻発、市内工場停車場、宿泊人の一斉検挙あり 8／25　午後９時町内米穀商に２名押し入り強談威迫の行為あり　⇒以下全て警察史による
国東	8／16　この間門司の暴動に参加せんとする者の旅行阻止 8／18　国東町に不穏の模様、米商全部召集、武蔵町に不穏の模様、盆会に関し消防団・青年団と協議 8／20　国東田深に米価と呼応し酒価問題起こり不穏の情浮説をなし人を惑わしたる門司市某（54）を拘留 8／21　旭村酒造家某・伊美村某に不穏の模様、富来・来浦方面暴動扇動者らしき者現る

町村	状　況（備　考）
国東	8／22　西安岐・安岐・奈狩江方面に不穏の形勢 8／23　奈狩江村不穏事件扇動者某（48）拘留 8／24　伊美村某に対する不穏再発　⇒警察史
日田	8　一時不穏の貼紙厳重警戒大事に至らず
佐賀関	8／15　町内騒擾事件発生の兆候あり警戒中、某方にて男女3～4名、もし首某者あれば騒動に参加某米穀商を襲うとの情報あり 9／22　精錬所木村請負人の下請人某、米価騰貴のため百数十名の水揚げ人夫を扇動同盟罷業を企図するも説諭
日出	8／14　“明日夕9時八幡様参”紙片街路に散布あり 8／30　町役場に脅迫文あり
鶴崎	8／15　午後9時、土方風の男某氏店頭に現れ、某氏方滞在の土木作業員を日当2円で臼杵騒擾に勧誘、下り列車乗車坂の市下車後厳重説諭
高田	8／21　悪漢・無頼の某10数人を引率暴動目的で帰来の風説当日夜中、米穀商にて米穀調査をなしたる某に厳重警告
杵築	8／18　門司より暴行者来襲などの風評盛ん、10数日にわたり警戒
その他	森・久住・三重・犬飼・四日市・長洲などの各署も取り締まりに努むるも具体的な記録無きを遺憾とす

所だけかと言うとそうではなかった。米が食べられるようになったのは、昭和一七年に食料管理制度ができてからである。

米騒動が起こったのは、農村ではなくほとんどが都市である。この資料にはないが、竹田町の文書報告の中に「農村部の方ではほとんど問題はない。むしろ米価があがって喜んでいるというのが実態である」と書かれている。農村部が比較的落ち着いていたのはなぜか。それは、日頃から米を食べていないと言う現実があったからにほかならない。

その背景には地主制があった。地主制は享保の頃からひろがり、明治十年代に確立する。このため戦前には大きな土地を持った地主が二〇パーセント前後の比率を占め、また、耕地の四四パーセントが小作地であった。小作人は自小作が四四パーセント、小作は二五パーセントで合わせて七〇パーセント、実に農民の七割が小作をしていたのが農地改革以前の農村の姿である。そして、だいたいの農家が耕地五反のいわゆる「五反百姓」であった。全国の比率でゆくと五反以下の農民がだいたい三〇パーセント前後で、一町に充たない農民が、六割を占めていた。大分県の場合は一戸あたり平均が七反七畝歩で、これが太平洋戦争が始まる前頃の耕作農地である。しかし、そのうち田圃は五反歩に満たない平均四反六畝歩で、あとは畑である。

大分県は一般に小作料が高く中でももっとも高かったのは日田郡で、これが原因で大正の終から昭和の始めにかけて小作騒動が起こったが、日田郡の小作料は最高七割五分であった。県下は耕地が狭いので、引下げを要求して小作を拒否しても他に引受ける農民が多いため、地主がつよく小作料はなかなか下がらなかった。だいたい五割前後が普通で、高いときには江戸時代の年貢六割とほとんど変わらない小作料を払わされた。貧しい小作人は、米を作りながら小作料に取られてしまうので米が残らず、麦粥にして箸で麦つぶをつまんで食べたというのが生活の実態であったようである。米を食べていないので、米騒動を起こさずとも別に困らなかったのである。

別府町の米騒動は大正七年の八月一三日夜から一四日の未明にかけて起こった。九州で一番最初に起こった米

騒動は別府町で、暴動に走って一番激しかったのは福岡県である。

当時の報道としては、「九州朝日新聞」「関門日々新聞」「大阪朝日新聞」「福岡日々新聞」などがあるが、「大分新聞」は報道統制されたため別府騒動の記事はない。これらの米騒動や農民問題等の資料は、現在法政大学構内の大原社会問題研究所に保存されている。

「福岡日々新聞」は、（大正七年八月十五日付）米騒動を次のように伝えている。

大分県別府町にては十三日に何者共知れず「十三日午後九時頃魚市場附近に集合せよ」の張紙を町内六ケ所に貼り出せるものあり。また同夜米価問題に関する町民大会開催されんとの流言盛んなりしが、午後九時に至り果然魚市場附近に六・七百名群集し、米屋襲撃の為出立せんとするにぞ、小野別府署長は厳重に取締り一応慰を加え解散を命じたれば、群衆は一時解散せんとせしに、漸次増加する群集に勢いを得て物凄き鬨を作り、先ず南立田町に向い精米所姫野吉太郎方（現星野米穀店）に殺到し、戸口より瓦石を投じ軒灯及び雨戸二階並に屋根瓦を破壊したれば、店員は二階より之に応戦し米糠を群集の頭上に投じたるも遂に叶わず、十四日より白米一升二十五銭にて販売するの貼紙を為したれば、群集は更に勢いづき数組に分かれ別府及び浜脇へ向ひ団子町肥後屋・秋葉町赤穂屋・港町平野屋・土居・藤沢・西法寺町森田・不老町局・浜脇平野屋等主なる米屋数十軒を襲撃し、別府署にても手のつけようなく一時無警察の状態に陥りしが、襲撃を受けし各米屋が十四日より一時二十五銭又は二十八銭にて販売すべしとの貼紙をなしたれば、群集は十四日午前一時過漸く退散せり、急報に依り藤沢保安課長は巡査十数名を率い同夜十二時大分より別府に出張し、別府署と打合せをなし首謀者の検挙に着手し、別府町向浜（某）を始め十数名を別府署に引致し厳重に取調べをなしつつあり。

他の新聞もこれと似かよったことを書いてある。

米騒動の研究（井上清・渡辺徹編）に依れば、一連の

米騒動は大正七年七月二三日富山県新川郡魚津町の越中女一揆に始まり、九月十二日の大牟田周辺と三池鉱山の騒擾が片付くまで五十日間にわたった。

近畿以西の動きでは、八月九日広島、十日に大阪・京都・岡山、十二日に兵庫・奈良、十三日山口、四国に飛んで十四日に香川・愛媛、十五日が高知、十四日に九州に渡り別府・福岡に飛び火した。米騒動は、一道三府三七県、三八市一七八村、三六九箇所に及び、この騒動に参加したものはおよそ百万人、検挙者二万五千人以上、起訴七百名に達した。三府二三県百箇所以上に五万七千人の軍隊が出動した。これが全国の状況である。

九州では全県に起こったのではなく、大分・福岡・宮崎で起こったが、被害は福岡を除き軽微であった。

米価の騰貴は、米の不作が原因で米不足をきたし、需要供給のアンバランスが原因で起こることが多い。当時の大分県の米価について大分市誌から玄米の騰貴の様子をみると（表二）、大正七年より価格が暴騰していることがわかる。全国的な動きをみると、大正五年（米騒動の二年前）の米価が一升一八銭、大正六年には七銭値上げして二五銭、大正七年は一月に三〇銭で七月には三六銭、米騒動の起こる頃には四五銭になり五〇銭を超す勢いにあった。

当時は今日のようにパンのような副食物が沢山あり米を食べぬというのではなくて、それだけに米をたくさん食べた。都市ではだいたい一人が一日に米を四合食べていた。副食があまりなかったので結局は米ばかり食べるという状態のなかで、米価が上がるととても食べていけない。そこで、米騒動ということになった。

（表２）米相場大分市玄米１石平均

大正２年	19円34銭	大正７年	31円60銭
3	14〃24〃	8	44〃15〃
4	11〃65〃	9	41〃55〃
5	12〃65〃	10	25〃96〃
6	18〃59〃	11	33〃95〃

別府町の米騒動を検証すると、その起りについては、「港町に集まれ」（関門日々新聞）と呼び掛けがあったと書いたものもあり、「福岡日々新聞」には「魚市場附近に群集した」と書いてある。「大阪朝日新聞」では、魚市場の他に松原公園にも集まった群集もあると書いてい

る。また、「別府今昔」には流石通り海岸の魚市場と浜脇公園（現浜脇中学校）に集結したと書いているが、大正五年の「別府町全図」を見るかぎりこの位置はまだ砂浜である。浜脇公園についてはどの新聞記事にもないので怪しい。むしろ、同地図に魚市場は、露天商や屋台で賑わっていた港町の別府港北側に見える。この魚市場から松原公園一帯にかけての地域が集結する経路にあったと思われる。

当時、別府町の九〇ケ所にちかい米屋が数百人の群集に襲撃されたと報じられている（関門日々新聞）。しかし、小石や瓦礫を投げる程度で人身に暴行を加える事はなかったようにある。その状況について「別府今昔」には次のような著述がある。

（略）どこの米屋でも親族一党や友人、知己の応援で大戸をおろした店の中にものものしい鉢巻き姿の警戒陣をしいた。二つ三つ石のつぶてが大きな音を立てて米屋の板戸に投げられると、どこからともなく五人、一〇人と人数がふえて悪口雑言を米屋に浴びせながら、石は二階にもはげしく投げ込まれた。

ワッショイ、ワッショイと鬨の声を上げながら港本町から団子町、中浜筋、楠町、浮世小路、流川通りを早足で走り回り、団子町と中浜筋にまたがっていた楠浜の藤原米屋に投石した一隊は、港町の平野屋米店にも押しかけた。

平野屋の主人は秋月平蔵という人物で、店は寿湯の横の関芳旅館の隣、現在旅館八千代の処にあった。流川からやってきた群集と柳湯の方向からきた連中が平野屋の周辺で騒ぎはじめた。全県下の騒ぎだけに警察側も警戒が手薄で、殺気立った温泉町の夜は、霊潮泉も寿温泉、柳湯など一人も入浴者がなくて、わめき声だけが港町一帯を包んだ。

平野屋の運命いかにと隣近所の者が心配していたところ、平野屋は表の戸をサッと開いた。そして高々と店の入り口にお祭りの時のご神灯の大ちょうちんをかかげ、その下にムシロをしいて平野屋さん親子がカミシモ姿でどっかと座っていた。米俵を横に積みあげて「これこの通り、お米はたくさんあります。米屋は売

り惜しみなど決していたしません。どうかお静かに、お静かに…」と威儀を正して口上をのべた。

騒いでいた連中も平野屋のカミシモ姿にはびっくりした。このような騒ぎも米屋や町民の良識、警察や町役場の指導など別府では割りあいにうまく運んで店を打ちこわされたり、米倉から米が強奪されるような大きな事件にならずに一週間ばかりで平静になった。

柳湯や寿温泉など米屋近くの温泉はその間ひっそりとして、さすがの港本町も昼でさえ人通りが少なかった。

別府町の騒擾は、先の文にもあるように暴動には至らず鎮静化された。

次に、大分市と臼杵町について簡単に述べておく。

大正六年三月（一九一七）にロシア革命が起こりソビエトができるが、その翌年、欧州大戦が休戦となり戦闘がおわった。わが国は、一九一八年（大正七年）から二二年までシベリアに出兵して大きな犠牲を払って撤退するが、その時に第一二師団第七二連隊（大分の連隊）が出兵した。ちょうど米騒動の時に、応召で県下から集められた兵士たちが大分市と別府町に分宿していた。このようなことから米騒動の報せは大分市にすぐに伝わり、一四日の朝から大分市内に「米を三十銭にせよ。然らざれば今夜別府町の如き暴状を受くべし」という張紙が出た。白米の安売りが始まって騒動に至らなかった。

臼杵の方は指原商店という米問屋が、神戸の鈴木商店とも手広く商いをし、米の投機にも参加していた。この指原商店を対象にして騒動が起こりかけたが、私服の警察官が集まった群集を三手に分裂させて米屋に誘導し、待ち伏せした警官が捕まえる体制をとったので、群集は蜘の子を散らすように逃げ去ったということである。これは指原氏の妻が残した日記に書かれている。

大分県では、このように不穏な状況にはあったが大したこともなく終わった。

ここで米騒動が起こった背景をみようと思う。

米価が暴騰したのは、要するに大戦景気がインフレー

ションをもたらしたためである。例えば津久見の蜜柑は江戸時代から栽培されていたが、蜜柑の栽培地域が広がったのは大正時代である。セメントもそうである。つまり、大正期は大分県も大戦景気に恵まれて発展するが、同時にインフレーションも進行して物価が騰貴した。

特に米価騰貴の原因は、地主や米穀商による米の値上がりを見越して取引して差額でもうける米への投機であった。大分県では明治三〇年代に米の投機所がつぶれたので、有力な米商人は神戸の投機所で全国的な投機の場に参加した。米を貨車何台も買込んで倉庫に貯えて値上がりを待つ米屋もあった。

次に、米の消費量が増加して需要が増えたこと。大正二年から九年までの大分県の人口推移の状態をみると、大分・別府だけが著しく増加している（表3）。すでに大正時代から人口の都市集中がみられ、過疎過密の現象が起こっていた。つまり、農業で食える者は農村に残るが、食えない者が都市へ集中するので都市の米の需要は増加するばかりであった。いっぽう、大戦好景気でアメリカの生糸の需要が激増して、養蚕農家が増加した。大分県でも大正四年に約二万六千戸あった養蚕農家が、年間に五千戸から六千戸増えて、三年後には約一万六千戸増の約四万二千戸になった。しかも、繭は大正四年に一石三八円であったものが大正七年には八〇円になり、二倍以上に跳ね上がり、農村にも多額の現金が入って米を食べるようになった。

（表3）人口1万人以上の市町村人口の推移(単位／人)

市町名	大正2年	大正7年	大正9年
大　分	38,905	43,842	43,150
中　津	16,429	12,508	13,602
佐賀関	9,376	11,386	11,349
臼　杵	21,380	20,779	18,817
日　田	11,310	11,203	10,805
東大野	10,907	10,474	10,258
別　府	21,970	25,663	26,321

（「統計から見た大分」より）

西国東郡の真玉町の町史に、

このころ養蚕の盛んであったのは言いようもない。お蚕さまさまで田舎の百姓も活気があった。地域の農家はほとんどが蚕を飼い、この五年間あまりは家計の最もらくな時代で、新しい着物を着、米の飯を食べ生活

はすっかり変わった。

いわゆる米の食べられなかった農村に米が入ってきたのである。このように、米の需要が都市でも農村でも増加した。

この傾向は全国的にもみられ、これに加えて、シベリア出兵で米が騰るという思惑が米価を押し上げたのである。

それから、第一次大戦で外米の輸入が減少したこと。大正六・七年は台風の被害があった。当時三〇万石（約三割）の米を他県に移出していた大分県も不作に見舞われ移出がとまった。全国的な米不足が米価を釣り上げたのである。

以上のことが米価騰貴の原因にあげられる。

人口の都市集中という面から別府町をみると、別府町は大正時代に大発展をしたことがわかる。（表4）その背景として備考欄にあるように、鉄道網が開けたことがあげられる。陸上交通の発達とあいまって海上交通もま

（表4）別府町人口統計

年　次	現住戸数	現住人口	対前年増減	備　　考
明治　44	3,120	14,045		豊州線　小倉－大分
大正　元	〃	〃		
2	4,444	21,970	＋ 7,925	
3	4,556	22,578	＋ 608	第一次世界大戦
4	4,622	22,935	＋ 357	～大正7
5	4,668	23,387	＋ 452	日豊線　大分－佐伯
6	4,742	24,044	＋ 657	豊肥線　大分－犬飼
●7	4,975	25,663	＋ 1,619	大湯線　大分－小野屋
8	5,086	26,084	＋ 421	
9	5,188	26,321	＋ 237	
国勢調査	6,339	28,647		
10	5,916	28,178	＋ 1,857	8県連合共進会

（「別府市誌」より）

たかなり発達した。細島・宇和島・尾道航路が毎日一回就航し、大阪航路は紅丸が隔日一回就航した。「大分県案内」（大正一〇年刊）には、汽船乗降員数一四万一千人と書かれている。

別府で米騒動が九州で最初に起こったわけは、広島より伝播したと言う説もあるが、やはり大阪方面から海路で伝播したものと考えるのが妥当であろう。

また、先にあげた「大分県案内」には、別府の入湯客が年間百万人と書かれている。相当に賑やかであったことがうかがわれる。

当時別府の職業構成をみると、自由業やそれに関連した商店や店舗を持たない職人さんが多く、主なものをあげると、貸座敷（遊廓）が六五軒で娼妓が五百人。宿屋が一七六軒、酒屋一五二軒、菓子・果物屋が二一五軒、床屋が一四〇軒で、料理屋・飲食店一三四軒となっている。産業系統は、大工・石工・竹細工業が五二五軒、農業が最も多く四七〇軒となっている。

当時の松原公園付近は次のようであった。

（松原公園）別府駅の南東六町浜脇駅の北五町にあり、当町第一の歓楽場にして、噴水池を中央に劇場、興業物、活動写真、玉突場、囲碁倶楽部等軒を並べ、浴客常に雑踏せり。

▼松涛館（別府唯一の劇場）園の中央、豊玉館（常設活動写真館）中浜通り三丁目、松栄館（常設活動写真館）松原通り、松原座（寄席）松原通り、なの字館（寄席）楠木温泉付近、別府館（寄席）竹瓦温泉横。

「大分県案内」

また別府港付近の様子も次のようであった。

国道が海岸線に出来上がったものの、まだ電車が九電前からようやく桟橋前まで延長された程度で大正年間には桟橋から北の広い国道はヤシの稼ぎ場になった。天然砂湯のカーブから児玉旅館、鶴田ホテル、愛媛屋の前あたりまでぎっしり屋台が並んで夜は電灯まで引いて入浴客がぞろぞろ広い道路一杯になるまで集まった。（中略）並んでいる品は八目うなぎ、ガマの油、薬草、白毛染め、忍術の本、反物、モグサ売り、源水

のコマ回し、ヘビ使い、茶碗の投げ売りなどで、（中略）とにかく売っている品はインチキとわかっていても、それを声音おもしろく売り付けようとする露店街は別府名物といわれ、入湯客は昼も暇さえあれば店から店をひやかして歩いた。屋台に人だかりしているなかを船名の入った旗をかついだ船問屋の宣伝員がハッピ姿でリンを打ちふりながら、「第一宇和島丸、馬関行き」（中略）とか大声をはりあげてふれて歩いた。

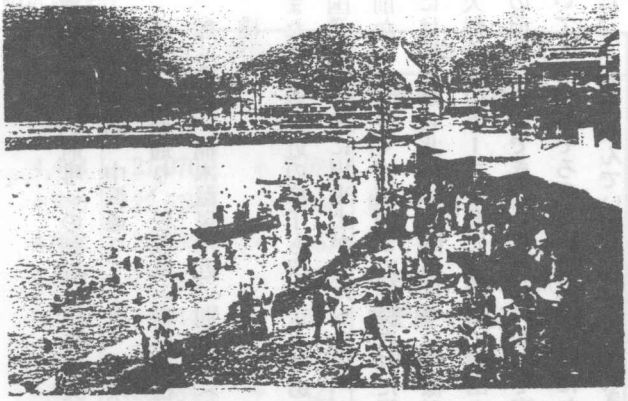
「別府今昔」

こう言うような賑わいが人口増加をもたらし、それが米騒動を誘発する原因になったとも思われる。

米騒動の対策および救済として、政府・県・市町村が行なったことについてふれてみたい。

別府町の事務報告書の中にも、

「大正七年八月十三日夜多数ノ集団米穀商ヲ襲イ不穏ノ行為ヲ演出セシ不祥事アリ。コレ他ナシ、無謀烏合ノ徒輩ガ一時ノ好奇心ニ煽ラレ、他地方ノ狂態を軽挙実現シタルニアラザルカ、要スルニ前代曾テ類例ナキ突飛ノ米価ニ苦シミ、生活難ノ極前後ノ思慮ナク事茲ニ出タルニ外ナラザルベシ。此場合ニ於ケル応急策ヲ町トシテ講ゼシメ、大正七年八月十四日町会議員各区長ヲ召集シ、小野別府警察署長臨場諸般事項ヲ協定シ、之ヲ普ク町民ニ徹底セシムルコト、同時ニ今後苛モ斯ル暴挙ヲ再演セザル様予防警戒等怠タラザリシ様（以下略）」



大正15年当時の北浜海水浴場

との記録があり、以後の別府町の救済対策があげられて

いる。

政府は、事前に暴利取締例（六年九月）、外米管理例（七年四月）、米騒動に関する記事取締通達（八月）を出し、一四・一六・一七日に新聞に記事掲載禁止令を発令してすでに版を組んでいない新聞の発行を押さえた。このために大分新聞は米騒動に関する記事を発表することが出来なかった。

県としては、投機・売惜しみに警告を発した。大分市では、米に湿気をうって膨らませたり、升目を誤魔化す米屋があるなど噂もあったので厳しく取り締まった。次に、内地米保有数量申告令を出して十石以上の保有米を申告させたり、外米を発注して一升十八銭ないしは二〇銭で売り出した。また、県は皇室から下賜された賑恤下賜金二万五千円（別府町千五百六九円）で米を買い入れ廉価販売をし、特に、貧困者には一升十三銭の安売券を一一万枚発行（別府町九〇円五〇銭）して救済の手を差しのべた。

別府町では、流川以北・以南・浜脇の三方面で救済募金（七千四百八一円五〇銭）を行ない、一方町内に米の廉売所を設け米の大安売りを行なった。また、八月十八日の大分新聞によると、寄付金で白米六七石を一升四四銭で買い入れ、三四銭で売り出すなどして、騒動の鎮静化をはかった。（　）内は事務報告書。

米騒動以後の米事情についまとめておこうと思う。

米騒動以後、米価は一升四四銭から四五銭で横這いになるが、昭和五・六年の昭和恐慌で一挙に一八銭に暴落して農村が大恐慌となる。その後、日中戦争から太平洋戦争にかけて、米は統制を受けて供出配給制度・食料管理制度がしかれた。戦後の食糧難を通りすぎて、高度成長をむかえると、食生活が多様化して米が余り、減反政策が七〇年より始まった。米は現在三割程度の自給率となり、他方米の自由化問題が起こって国内は大いに揺れている。